

令和 5 年 6 月 20 日現在

機関番号：32704

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K02250

研究課題名(和文) 降霊術から腹話術へ～西洋近代「魔女」概念の形成に関する研究

研究課題名(英文) From Necromancy to Ventriloquism: A Study on the Formation of the Modern Western Concept of "Witches"

研究代表者

高井 啓介(Keisuke, Takai)

関東学院大学・国際文化学部・教授

研究者番号：00573453

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：古代イスラエルの降霊術師・降霊術と、古代ギリシア・ローマの腹話術師・腹話術という二つの相異なる人物と術が、旧約聖書の翻訳および釈義の場面で強く結びつき、その両者が結合した術者と術のイメージが、のちに西洋近代の魔女および魔女術の概念の形成の一端に寄与したことを文献学的・図像学的・思想的に例証し、論文および口頭発表の形で研究の成果を発表した。さらに、降霊術・腹話術が関わることとなった魔女および魔女術が、現代的エンターテインメントの腹話術のなかに要素として流れ込んでいることもその道筋を明らかにすることができたが、こちらの論文化の作業は今後の課題である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまでほとんど学術的にその関係性が注目されてこなかった古代イスラエルの降霊術と近代以降のエンターテインメントとしての腹話術との関連性を、西洋近代「魔女」概念を媒介として考察を行ったこと自体にまず大きな意義があった。また古代イスラエルの降霊術師と古典古代の「腹話術師」を結び付ける要素を体内のダイモン、ダイモニオンに見て、それを「魔女術」形成の一つの要素であることが確認できたことにも意義がある。加えて、文献学的のみならず、美術史的な手法を用いて、テクストとその中に表現される「降霊術師」「腹話術師」が西洋近代の魔女表現の一部として存在するようになったことを明らかにできたことも意義として大きい。

研究成果の概要(英文)：Two distinct personalities, an ancient Israeli necromancer and an ancient Greek-Roman ventriloquist, were found to be strongly linked in the translation and exegesis of the Old Testament. In addition, the image of the technique combining the two contributed to the formation of modern Western witchcraft. This research exemplified this point philologically, iconographically, and in the history of thought, and the results were presented in the form of papers and oral presentations. In addition, I was able to clarify that witches and witchcraft, which have become involved in necromancy and ventriloquism, have flowed into contemporary entertainment ventriloquist as an element. However, the task of writing this paper is a future task.

研究分野：思想史

キーワード：ヘブライ語聖書 降霊術師 セブチュアギンタ 腹話術師 ダイモニオン ダイモン エンガストリ
ミュートス ビューティア

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

19世紀初頭に米国で活躍した腹話術師ジョン・ラニーは、1804年7月14日号のコロンビア・センチネル紙において、「エンドルの魔女」がその「腹話術」を駆使してサムエルの幽霊が語ったかのように見せた、その再現が今夜の自分の腹話術のショーで披露されるのだと言う内容の広告を掲載した。「エンドルの魔女」とは、旧約聖書サムエル記上28章に登場する女性降霊術師のことを指しているのであろうが、ヘブライ語聖書本文には、「腹話術を駆使する魔女」など登場してはいない。彼女は降霊術によって、サムエルの死霊を呼び上げ、ヤハウエの神託が預言者によって依頼者サウル王に告げられる、その過程において自らに期待された媒介者としての職責を果たしたに過ぎない。彼女が執行した降霊術の具体的手順に関してテキストは黙して語らず、彼女のそのときの行為がテキストにおいて魔女的だとして批判されることもない。それではなぜ、この女性降霊術師は、このように性格を変化させられてしまったのかという問いが浮かび上がる。この事柄の発見が、本研究を開始する動機となった。

2. 研究の目的

本研究には、古代イスラエルの降霊術師・降霊術と、古代ギリシア・ローマの腹話術師・腹話術という二つの相異なる人物と術が、旧約聖書の翻訳および釈義の場面で強く結びつき、その両者が結合した術者と術のイメージが、のちに西洋近代の「魔女」および魔女術の概念の形成の一端に寄与したことを資料的に例証しようとする目的があった。第一に、ヘブライの降霊術師とヘレニズムの腹話術師が同一視されるようになる過程を明らかにしようとした。第二に、この両者が同一視された降霊術師＝腹話術師が、西洋近代に至って「魔女」概念の一部を構成するようになった過程を明らかにすることを目指すとともに、先行研究で意外にも見過ごされてきた、降霊術と腹話術が結びつくという事象の思想史的意義をも明らかにしようとした。

3. 研究の方法

降霊術・腹話術・魔女術という三つの現象・思想の関連を、文献学的・図像学的・宗教史的に考察した。

4. 研究成果

2017年度には、以下の2点に集中して実施した。(1)古代イスラエルの女性降霊術師を表す単語エシェト・バアラト・オーヴが聖書の他言語への翻訳版においてどのような単語に変化したかについて比較分析をすること。これはBibleWorks10をはじめとする聖書データベースソフトウェアを最大限に活用して行った。アラム語、シリア語、ギリシア語、ラテン語、その他すべての翻訳版の写本および当該箇所のテキストを確認し、聖書翻訳においてヘブライ語のエシェト・バアラト・オーヴが別の単語(ギリシア語のギュネー・エンガストリミュートスおよびそれぞれの言語でそれに対応する語)へと置き換えられていることを確認すると共に、置き換えられたその単語がそれぞれの言語においてどのような意味と内容および背景を持つかについて分析を深めた。(2)原語と翻訳語を比較することにより、ヘブ

ライの降霊術師とヘレニズムの「腹で語る」占い師とが同一視されるようになる理由を詳述すること。ユダヤ教ラビおよびキリスト教教父の聖書注解（サムエル記上 28 章）において変化の過程を確認し、その背景にある変化を促した理由を解明しようとした。具体的には、オリゲネス、エウスタティウス、テオドレトスをはじめとするサムエル記上 28 章の聖書注解を詳細に読み込む作業を行った。そのなかで、ギュネー・エンガストリミュートスへの評価がおおむね負のイメージに支配されるとともに、その負のイメージの源泉が体内のダイモンを抱えているからであると見做されるようになっていたことにあったことが確認された。以上の成果を、2017 年度の日本宗教学会において「旧約聖書の降霊術に関するキリスト教教父の釈義について」というタイトルで報告を行い、その成果が学会誌『宗教研究』第 91 巻 213-214 頁に刊行された。

続く 2018 年度は、研究内容を以下の 3 点に集中して実施した。(1) 旧約聖書の降霊術師と預言者の役割の違いの確認。ここでは、これまで、旧約聖書の降霊術師と預言者の役割の違いが過度に強調されていたことを指摘し、両者の役割の正しい理解と前者の役割の明確化を行うことにより、降霊術が常にまどってきたマイナスイメージ(負の側面)がどのように生じたかを指摘することができた。その成果が、「女性降霊術師と女性預言者 旧約聖書における媒介者の正当性について」『霊と交流する人びと - 媒介者の宗教史(下巻)』杉木恒彦・高井啓介編, 宗教史学論叢 22, リトン, 2018 年 12 月, 83-105 頁として刊行された。

(2) 古代末期から中世のユダヤ教およびキリスト教の聖書釈義において、降霊術師 = 腹話術師がいかなる評価を獲得し、宗教的含意が付与されていくかについての考察。ここでは、キリスト教教父の聖書注解のなかでエンガストリミュートスの体内に悪霊のイメージが強いダイモン、ダイモニオンの存在があるということが昨年度の研究によって明らかになったことを受けて、本年度は中世を経て 16 世紀に至るまで関連資料を詳細に検討することで、エンガストリミュートスとされた降霊術師とダイモンの関係をさらに明確にすることができた。この成果についての論文の執筆も開始した。(3) 16 世紀以降の英米の歴史資料・文学資料のなかに描写され、腹話術師とされる多くの預言者・魔術師たちへの言及とその評価の分析。それらの史料・資料のなかには、「霊」が人間の体内に憑依することによって引き起こされたとされる現象が多くみられるが、そのような現象がどのように解釈されていたかを分析して、占い・予言をする者の腹で語られるその声を、悪霊の声、ダイモンの声とする理解がここでも定着しつつあったことを確認することができた。

当初最終年度を予定していた 2019 年度は、研究内容を以下のように実施した。(1) 降霊術と腹話術および魔女が描かれた図像の分析およびその分析の論文化の作業。古代末期以降西洋近代以前に至るまでの図像をほぼ網羅的に収集し、その分析を進め、テキストと図像との関係性の特徴を明らかにした。(2) 現代的エンターテインメントとしての「腹話術」の歴史に関連する資料の収集およびその分析と論文化の作業。降霊術と降霊術師のダイモンに関する言説が脱神話化されることにより、現代的なエンターテインメントとしての腹話術および腹話術師が成立していく道筋を確認することができた。(3) 旧約聖書テキストおよびその解釈についての文献学的研究の成果をまとめる形での最終的な論文執筆作業および学会発表での成果の発表の準備。降霊術師の登場する旧約聖書テキストおよびその解釈をダイモンという観点からまとめたおす作業を行った結果、論文執筆および学会発表に向けてのおおよその見通しを得ることができた。この年度では、計画した海外での調査・資料収集を行ったが、(1) および (3) に関してその結果が十分ではなく、さらに海外からの書籍の注文を行おうとしたが、研究成果を得るためにどうしても必要な書籍のいくつかは

次年度での到着も見込まれることになったので、研究計画を一年延長することにした。

研究機関を1年延長して迎えた最終年度の2020年度は、以下の2点に集中して研究を実施した。(1) エンドルの降霊術師に言及する旧約聖書テキストについてのユダヤ教および初期キリスト教以来の釈義に関しては、前年度までに、エンドルの降霊術師の登場する旧約聖書テキストに対するキリスト教教父の釈義のなかで降霊術師の身体内部に存在するとされるダイモン(およびダイモニオン)が主要な論点となっていることに注目し、その観点から釈義の流れを整理する作業を行っていた。本年度もその作業を継続するなかで、論文執筆に向けてのおおよその見通しを得ることができたため、その成果を論文「エンガストリミュートのダイモニオンとダイモンについて」『関東学院大学人文学会紀要』第133号(2020)279-294頁として発表した。(2) 降霊術と腹話術との関係性については、魔女が描かれた図像の分析を通して論文化する作業を終えて論文執筆を目指したが、コロナ禍でのオンライン授業という突発的な事態に対応するなかで相対的に研究の時間が減少し、完成することはできなかった。しかしながら、この関係性については講演会において発表する機会が与えられたため、成果について以下の講演のなかで取り扱った。すなわち、「降霊術師の『腹話術』 死者の霊はどのようにして生者に語るのか」(2020.11.21)2020年度日本聖書学研究所公開講演会 生と死の境界 於オンラインツール zoom。ただし、論文の執筆のため、コロナ禍における特例を活用し、次年度も研究を継続する申請を行いそれが受理された。

2021年度もコロナ禍のなかで、前年度同様に本研究継続のための時間が相対的に減少し次年度まで研究期間を延長することとしたものの、前年度の研究(2)については、論文「降霊術師の『腹話術』 サムエル記上28章の解釈史・受容史をめぐって」『聖書学論集』52(2021)1-18頁として完成をみた。

最終年度の2022年度には、最終的な研究のまとめとして、「降霊術」・「腹話術」・「魔女術」の関係性をより明確にするために、古代末期以降の聖書写本・絵画等のなかの「降霊術師」表象と近代以降の絵画のなかに表現された「魔女」表象、および現代のエンターテインメントの広告等における「腹話術師」の表象について網羅的に収集しかつ分類しつつその分析を進めた。さらに、その成果およびこれまでの研究成果を国外の学会で発表すべく準備を進めたが、本年度も引き続きオンライン授業の負担が重く、その状況のなかで相対的に研究に従事する時間が減少したために、海外渡航がかなわず発表を行うことはできなかった。この点すなわち今年度の研究成果の口頭発表については、今後の研究においてなされるべき課題となる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 高井啓介	4. 巻 143
2. 論文標題 エンガストリミュートのダイモンとダイモニオンについて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 関東学院大学人文学会紀要	6. 最初と最後の頁 279-294
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 高井啓介	4. 巻 91
2. 論文標題 旧約聖書の降霊術に関するキリスト教教父の釈義について	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 宗教研究	6. 最初と最後の頁 213-214
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 高井啓介
2. 発表標題 「降霊術師の『腹話術』 死者の霊はどのようにして生者に語るのか」
3. 学会等名 日本聖書学研究所公開講演会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 高井啓介
2. 発表標題 旧約聖書の降霊術に関するキリスト教教父の釈義について
3. 学会等名 日本宗教学会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 E・シューラ 著、高井啓介・飯郷友康訳	4. 発行年 2021年
2. 出版社 教文館	5. 総ページ数 471
3. 書名 イエス・キリスト時代のユダヤ民族史VI (翻訳)	

1. 著者名 高井啓介	4. 発行年 2020年
2. 出版社 リトン	5. 総ページ数 423
3. 書名 一神教世界の中のユダヤ教	

1. 著者名 高井啓介	4. 発行年 2018年
2. 出版社 リトン	5. 総ページ数 376
3. 書名 霊と交流する人びと 媒介者の宗教史 [下巻]	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------